研究ノート

フロンティアこそ環境破壊の原点

――ターナー的征服史観に代わる生態学史観登場の意味――

冨所隆治

ヨーロッパ人のアメリカ大陸渡来以後、土地の所有権が設定され、土地に対する私的な収奪が法的に保障されることになった。アメリカン・ドリームは世界に比類ない豊かな土地と資源の私的収奪によって叶えられるものであった。

ひとりアメリカ国民だけが眼前の繁栄に眩惑されて、〝開拓〟の名の下にすすめられた環境破壊と資源消耗によるドリーム実現の裏面を看過し、償うことのできない大いなる遺産を失ってきたのであろうか。近年、東京大学の綿抜邦彦教授[1]をはじめ多くの自然科学者が警告する全地球的規模での環境破壊に経済学の分野からは一橋大学の室田武教授[2]らの注目すべき取組みが示されてきている。

しかし、残念ながら、アメリカ史研究の分野において、はたしてこの問題にどれほどの取組みがあったろうか。

ここに紹介するフロンティア史家ジェイコブス教授による生態学史観の提唱はアメリカの歴史学界のみを対象としているのではない。前世紀末から今世紀初頭のアメリカ歴史学界を風靡したターナー学説は、その後多くの批判を受けながらも一つの仮説としての有効性をほゞ認められてきたといっても決して過言ではない[3]。

言うまでもなく、F・J・ターナーは一八九三年のアメリカ歴史学協会の年次大会において、かの有名な「アメリカ史におけるフロンティアの意義」なる論考を発表し、この中でアメリカの民主主義ないしアメリカ人の国民性がフロンティアにおける経験を通じて形成されたものであることを主張して、チュートン民族淵源説に反旗を翻(ひるが)えした[4]。ターナーは繰返される西漸運動の中にアメリカ的価値の創造を認め、未開の荒野を拓くアメリカ文明の前進を社会進化論の立場から讃美した。

ターナー学説は新大陸への入植の発端にまで遡って、フロンティアの消滅とともに独占資本の勝利に帰結したアメリカ的秩序の形成を肯定するものにほかならなかった。それはまた、ヨーロッパ・コンプレックスを脱して、パックス・ブリタニカに代わるパックス・アメリカーナの黎明を告げる宣言でもあった。

学問の命運も国家盛衰のいわばバロメーターであろうか。ターナー学説に対する決定的一撃は実にアメリカの威信が失墜していくなかに訪れた。はからずも、アメリカのベトナム戦争への介入が行き詰り状態にあった一九七〇年の、『アメリカ歴史学協会ニューズ・レター』第七号は、「辺境人、毛皮商人および他の悪者たち――アメリカ史におけるフロンティアの生態学的評価」[5]と題するカリフォルニア州立大学のジェイコブス（W. R. Jacobs）教授の論考を掲載した。このなかでジェイコブスは、これまでのターナー的フロンティア史が征服者の立場にたって、インディアンとの毛皮取引きがアメリカ文明の道を拓き、経済成長に寄与した受益面にのみ注目している点を指摘し、環境破壊の損失を生態学的立場にたって鋭くえぐり出した。[6] それはまた、物的生産の増大のみを善として追求してきたアメリカ的価値観を根底から批判した。彼は毛皮取引きを肯定してきた歴史家たちの企業家的偏見を断罪した。さらに、彼はこの取引きがアメリカ史の最初の二世紀間に経済的好況を助長したとのウェッブ（W. P. Webb）の評価を一蹴し、いかにそれが野性動物を激滅させ、ひいては土地とインディアン、さらに白人社会にも深刻な恒久的影響を及ぼしているかを指摘した。[7]

大陸国家アメリカは比類なき資源に恵まれ、工業化を押し進め、限りない物的繁栄を謳歌してきた。しかし、これと表裏して貴重な野生動物の激滅、資源の枯渇のみならず、大気と土壌の汚染、水質汚濁、土壌流失によって生態系は救い難い危機に直面しているとの警告を呼び起こした。

はからずも、ジェイコブス論考の公刊された同じ年の二月十日に、ニクソン大統領は議会に公害防止特別教書[8]を提出するのやむなきにいたった。それは特に工業汚水や自動車の排気ガス対策など三十七の重点施策を網らし、積極的な行政の取組みを内外に示すものであった。翌七一年にはアメリカは国際収支のみならず貿易収支も赤字に転じ、いわゆる金とドルとの交換停止（ニクソン・ショック）に踏切らざるを得なくなった。まさに、パックス・アメリカーナの黄昏に、環境保護主義にたって、大陸征服の事業を批判し、アメリカ人の価値観そのものまで根底から覆す生態学史観の登場をみたのである。

ジェイコブスの指摘するように、これまでのアメリカ史

の叙述を支配してきたものは征服者の考え方である。それは新大陸に存在したあらゆるものを技術的熟練をもって利用し、支配できるすべてのものを商品化し、私有財産として取り込む資本の論理にたつ収奪者の行状を追認するものである。ジェイコブス流にアメリカ史を表現すれば、鉱物、水流、土壌、木材、野生動物およびインディアンに対する抑制のない収奪史である。[9]

ニューズ・レターの論考に続いて、実証的検討をすすめたジェイコブスは、一九七七年八月にアメリカ歴史学協会の太平洋岸部会の会長報告として、「大収奪――アメリカ・フロンティア史における環境問題」と題する論文を発表し、このなかで、コロンブスの新大陸発見にはじまるヨーロッパ人、のちのアメリカ人が与えた環境的衝撃の凄まじさ、野生動物や土地や資源の徹底した収奪とともにインディアンを絶滅の危機に陥いれ、かつて幾世紀にもわたって保たれてき大陸における生態系の均衡を崩壊させてきた事実を検証してみせたのである。[10]

そもそも、新大陸に渡来した探検家や冒険家は一かく千金を夢見た連中ではなかったか。黄金の夢は消えたが、打出の小槌となったのが毛皮取引きであった。インディアンに野獣狩りを請負わせれば、殺戮に伴う精神的苦痛は回避できたのか。幸か不幸か、殺戮は神の名において浄化できた。自然に対する人間支配を前提とする人間中心主義のユダヤ教やキリスト教の倫理をもつ白人は殺戮に何らの宗教的ためらいもなかった。人間と動物を峻別するユダヤ教やキリスト教の断絶論理はインディアンに対するヨーロッパ人の優越にも表明された。

ターナーにとって、フロンティアは野蛮と文明の接合点であり、インディアンは西漸運動の妨害物として描かれている。[11] インディアンに対する劣等視は大陸発見の当初からみられるが、ジェファソンでさえ、『ヴァージニア覚え書き』のなかで、土地の恩恵は土地を征服した白人農民に与えられるべきもので、インディアンに残されるべきではない、と論じている。[12] ヨーロッパ人、のちのアメリカ人が異人種の原住民をより劣等なものと決めてかかる心の底には、彼らを劣等な地位に置くことによって、収奪と破壊を合理化する必要があったからである。

ターナーとその信奉者たちによれば、自由な毛皮と皮革、自由な土地、自由な鉱物、それらは偉大な西方移住とアメリカ社会の発展のすべてであった。しかし、ここに言う自由とは白人・征服者による収奪の自由以外の何ものでもなかった。しかもジェイコブスの指摘するように、ターナーは私的利益のために、ためらいもなく大いなる遺産を収奪し、生態系を破壊した猟師や開拓民をアメリカ史の英雄と

して祭り上げる神話の形成に手を貸したのである。[13]

ところで、ターナー学説は一九世紀末のアメリカの実業界とそれを取り巻く多くの受益者の心情を代弁していた。アメリカがまさに帝国主義的海外膨張に乗り出さんとしていた時点にあって、これまでの大陸開拓の事業が商業的にも道徳的にも善として積極的に擁護されねばならなかった。海外膨張論者にとって、フロンティアの経験によって培われた民主主義と国民性をもつアメリカの未開地域への政治的・経済的進出によってこそ、アメリカと世界経済の成長、キリスト教文明の勝利ならびに安定した世界秩序の形成が約束されるという道理を示す必要があった。

折りしも、このような道理の設定に合致した社会状況が現出していた。金融寡頭支配の出現、南部における黒人選挙権剝奪運動とインディアンの保留地への駆逐が象徴している状況である。そしてこれらの状況を支配したのがスペンサー（H. Spencer）らの唱導した優勝劣敗の社会進化論的思潮の存在であった。

こうした思潮をもっともよく代弁していたのが、経済学者でマサチューセッツ工科大学の元学長であり、一八九〇年まで三度にわたって国勢調査の監督官をつとめたウォーカー（F. A. Walker）である。彼は知的、道徳的また財的能力における勝利者を讃え、同時にアメリカニズムの魂と呼ぶところの創意性、適応性および未知の広大な西方領土における処世能力をもつアメリカ人の才能を讃えた。[14] ジェイコブスの指摘するように、ウォーカーが創始したフロンティア理論を僅かに修正し、発展させたのがターナーであった。[15] ターナーはウォーカーと同様に自然の営利的収奪と征服を意味するフロンティアの前進をアメリカ発展の道理とし、仮説とはいえフロンティア理論を提起したのである。[16]

二〇世紀に入るや社会進化論は革新主義の前にもはや社会思想としての存在を主張しえなくなったのであるが、ターナー学説自体はターナーが没する一九三二年までは批判の矢面に立つことはなかった。そしてその後はじまるターナー批判とて、安全弁説などをめぐって華々しく展開されたとはいえ、ターナー史観そのものを根底からつき崩すものではなかった。[17]

勿論、これまでに環境保全のための啓蒙的努力が存在しなかったわけではない。特定業者による天然資源の私的収奪が国家にとって償うことのできない大きな社会的損失を結果したというヴェブレン（T. Veblen）の指摘、シェラ・クラブを創立し、土地の荒廃を防ぐアメリカ人の責任を説き、環境保全主義を提唱したミューア（J. Muir）の運動、[18] アイゼンハワー政権時代に私的に森林資源と野生動物を収奪した不在地主たちの殺害の経済を衝いたダヴォウトウ

（B.DeVoto）の告発、動植物の種の絶滅と商業的選択に伴う種の限定による生態学的危機と浪費的農業慣行による表土の流失のなかで大量の化学肥料の投入によって行なわれる略奪生産の実態を明らかにしたザウアー（C. O. Sauer）の警告、草食動物を襲う肉食動物さえ環境上のバランスの維持に不可欠の存在であることを明らかとし、土地政策が経済効果と同時に土地倫理を基に策定されるようにもとめたレオポルド（A. Leopold）の提言、一九五〇年代に農務省と工業研究基金による助成研究が、生態環境を無視した危険な化学毒物で国土を汚染する結果になったことを明らかとしたカーソン（R. Carson）の研究、など注目すべき挑戦[19]を無視して、多くの歴史家はターナー的見解に追従してきたように見受けられる。

ジェイコブスは環境大収奪の過去を暴きながら現代を告発しているのである。再生できない資源の許容限度を越えた収奪、環境破壊に伴う累積的影響の増大、農務省や原子力委員会など政府諸機関が時に科学者を後援して演ずる環境破壊の促進的役割、新らたな人口流入に伴う資源とエネルギー保存の危機、何らの償いもなく収奪された環境の継承、などを摘発する。[20]

アメリカン・ドリームを木っ端微塵に打ち砕いたエネルギー危機と国家を襲う汚染の現実に目覚め、一世代前のロビンソン（J. H. Robinson）のように歴史の教訓と道義を実践につなぐ新しい歴史学としての環境史に取組むべき歴史家の使命こそジェイコブスの訴えるところであった。[21] それでは環境史の核心に据えられるものは何か。従来の人間中心的な征服史観に代わる自然と人間の共生をめざす生態学史観である。言うまでもなく土地倫理と自然への敬愛にもとづく史観である。近年アメリカにおいて流行をみるエコフィクション[22]（ecofiction, 生態学の立場から自然の尊厳を主張する文学作品に対する呼称）が訴える（土壌、水、植物と動物を含めた）土地の生存権と人間の生存権の同等視において、生態系の維持は特定先進工業国に限定されるものではなく、いわゆる開発途上国にも等しく適用される原則であることを銘記する必要がある。大陸発見後のアメリカ社会経済史研究にとって生態学的評価は必須である。

註

(1) 綿抜邦彦『地球のカルテ』、共栄出版社、一九八五。

(2) 室田武「砂漠化か緑の回復か」『季刊　現代経済』四八号（一九八二）三二～四三頁。

(3) R. A. Billington, *The American Frontier Thesis : Attack and Defense.* (1971), pp. 17-27.

(4) Frederick Jackson Turner, "The Significance of The Frontier in American History", in *The Turner Thesis,*

ed. by E. C. Rozwenc. (1948) pp. 1-18.

(5) Wilbur R. Jacobs, "Frontiersmen, Fur Traders, and Other Varmints, An Ecological Appraisal of The Frontier in American History", *American Historical Association Newsletter*, VII (1970), pp. 5-11. 以下 "Frontiersmen"

(6) *Ibid.*, pp. 5-8.

(7) *Ibid.*, p. 7.

(8) この年の秋の中間選挙をにらんで、野党民主党の先手をとって、新年以来矢つぎばやに公害防止構想を発表し、国民にアッピールしている。

(9) Jacobs, *Ibid.*, p. 7.

(10) W. R. Jacobs, "The Great Despoliation: Environmental Themes in American Frontier History", *Pacific Historical Review*. XLVII, No. 1 (1978), 以下 "Despoliation"

(11) Turner, *op. cit.*, p. 2. ff.

(12) Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia*, ed by William Peden (1955), 53ff., 82ff.

(13) Jacobs, "Frontiersmen", pp. 9-10.

(14) cf. Walker, "Mr. Bellamy and the New Nationalist Party", *Atlantic Monthly*, LXV (1965), p. 248.

(15) Jacobs, ed, *Frederick Jackson Turner's Legacy*(1965), p. 84.

(16) *Ibid.*, p. 19.

(17) cf. Billington, *op. cit.*

(18) J・W・T・ヤングズ著、中里・松尾・林共訳『アメリカン・リアリティーズ』(一九八五) 第三章「環境保全主義の誕生」四一一五八頁。

(19) Jacobs, "Despoliation", pp. 11-23.

(20) *Ibid.*, pp. 24-25.

(21) ジェイコブスは環境史研究のために、例えば毛皮取引がアメリカに与えた衝撃について学ぶために歴史研究者は民族学、植物学、林業学、生態学、動物学および自然科学について初歩的知識以上のものをもたねばならない、とのべている。(Jacobs, "Frontiersmen", p. 9.)

(22) Patricia Greiner, "Radical Environmentalism in Recent Literature concerning The American West", *Rendezvous*, 19 (1983), pp. 8-15.

付記

ジェイコブス論文は筆者が昭和六十一度文部省在外研究員として渡米中に直接教授より賜ったものである。末尾ながら篤く御礼申し上げたい。

(群馬大学教育学部助教授)